

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2025 年

No. 168

2025年3月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3富山房ビル5階 Tel.03-5801-6788 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2025 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

メディアの性情報と性情報リテラシー® 1
JASE e-booklet「朝山新一の性科学と性教育」
を読んで..... 7
"めぐみ"を生きる⑫ 11

わたしたちの性教育アクション⑭..... 12
多様な性のゆくえ⑤..... 13
今月のブックガイド..... 14
JASEインフォメーション 15

メディアの性情報と性情報リテラシー®

この10年で変わったこと、変わらないこと

ジャーナリスト／性情報リテラシー® 教育協会会長 渡辺 真由子

はじめに

「性教育にメディア・リテラシーの導入を」と本誌で2013年に提言⁽¹⁾してから、十余年が過ぎた。当時の拙稿では、性的な内容を扱う雑誌や漫画、アダルトビデオ(AV)、さらにインターネット等のメディアが発信する性情報について、青少年の性意識・性行動に与える影響を、筆者の取材や調査から明らかにした。それらの結果によれば、性情報が伝達する様々なメッセージ、及びそこに潜む価値観は、現実社会における性暴力を引き起こす要因となっている。

誰も性の尊重される社会をつくるため、筆者が2012年に創出した概念が、性情報に対するメディア・リテラシー、すなわち「性情報リテラシー®」⁽²⁾であった。メディア・リテラシーとは、「メディアの特質、手法、影響を批判的に読み解く」能力等を指す。性情

報リテラシー®とは、そのいわば性情報版で、「メディアが発信する“性に関する情報”を鵜呑みにせず、批判的に読み解く能力」と考えてもらえばいい。

では、10年が経過するなかで、メディアの性情報と性情報リテラシー®をめぐり、変わったこと、変わらないことは何だろうか。性情報については、関連が疑われる性犯罪や性的トラブルが多発したことに加え、AI(人工知能)の発達による新たな問題が噴出した。まさに激変の10年といえる。

反面、性情報リテラシー®の教育や法整備については、民間レベルで普及活動の萌芽があるものの、国レベルでの政策は遅々として進まない。本稿はこうした状況を整理し、性情報リテラシー®の新たな10年へ向け、その役割を考える議論の礎としたい。

この10年、日本で発生した主な性犯罪や性的トラブルは、どのようなものだったか。そして私たちの社会は、どんな対策をとってきたのか。変遷をまとめた

表1 年表：性的トラブルと対策をめぐる10年

主な性犯罪・性的トラブル	性をめぐる教育・法整備
2014 札幌小3女児監禁事件	2017 刑法性犯罪改正
2016 埼玉女子中学生わいせつ事件	2018 ユネスコ『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』（改訂版）
2016～2022 大阪小学生女児10人性的暴行事件	2018 包括的性教育への関心の高まり
2021 千葉不動産女性強制性交等致傷事件	2020 性情報リテラシー [®] 教育協会設立
2022 滋賀医大生3人強制性交等容疑で逮捕	2023 「生命（いのち）の安全教育」本格開始
2023 ジャニーズ性加害問題をイギリスBBCが報道	2023 刑法性犯罪改正
2023 DJ SODA氏が音楽フェスで性被害	
2023 著名芸人の性加害疑惑報道	
2024 著名タレントの性的トラブルとフジテレビ問題	
2024 生成AIによるポルノ被害の深刻化	2025 鳥取県、AI創作の児童ポルノを取り締まる条例改正へ

のが表1の年表である。

主な性犯罪・性的トラブルと、性情報との関連性

（1）性情報の直接的な影響が疑われる事案

◆札幌小3女児監禁事件

2014年に北海道札幌市で発生した、小学3年生の女児が監禁された事件。加害者の20代の男は、女児を自宅アパートに連れて行き、粘着テープのようなもので目や口をグルグル巻きにしたとされる。「アダルトゲームの影響もあり、かねてから女児を思い通りにしたいと思っていた」と、裁判で検察側が指摘した。

◆埼玉女子中学生わいせつ事件

2016年に埼玉県草加市で発生した強制わいせつ事件では、加害者の30代の男は「放射能の調査」と称して女子中学生の自宅に入り、体を触ったとされる。「インターネットに掲載された成人向けの同人漫画を読み、手口をまねした」と供述。埼玉県警は同漫画の作者に対し、作品内容が模倣されないような配慮と、作中の行為が犯罪に当たると注意喚起を促すことなどについて、異例の要請をした。

◆大阪小学生女児10人性的暴行事件

読者の記憶に新しいのは、この2025年2月に無期懲役の判決が出た、大阪の小学生女児連続性的暴行事

件だろう。判決によると加害者の20代の男は、2016年から2022年にかけ、大阪府内で1人で留守番するなどしていた小学生の女児を狙って、性的暴行を繰り返した。被害者の数は10人に上る。カッターナイフを示して「泣いたら殺す」と脅す手口が多く、スマートフォンなどでわいせつな行為の場면을撮影し、保存していた。

「アダルトサイトで見た漫画の内容をまねて、小学生の女の子の後をつけたりして、住んでいる家や家族構成など女の子の行動を何日も確認したのちに、女の子を待ち伏せして犯行に及んだ」と加害者は供述している。

本件が明確に示したのは、メディアの性情報を参考にした加害者における、罪の意識の薄さである。加害者は自身が撮影した犯行動画を後日に見返していたが、「アダルト動画の作品を見ている感覚」だったという。さらに犯行時、女児らが痛がり泣き叫んでも、「嫌がっている、傷つけたという認識はなく、気持ちよくさせたと思っていた」と述べた。逮捕当ても「なぜ責められるのか分からなかった」と不満を抱いたという。被害者やその家族に対しても、「精神的苦痛、経済的負担が、自分の想像をはるかに超えていた」とする。

犯行時に被害女児の名前や年齢まで聞き出した上、犯行後には女児がどういう行動を取るのかに興味を持ち、行動を確認し続けたケースもあった。「全てを知りたいという支配欲があった」と加害者は説明した。

子どもを性的に描写する漫画やアダルト動画では、子どもは性的に奉仕する存在とされることが多い。「相手からの性行為を喜んで受け入れ、初めは痛がっても後に気持ちよくなっていく」というパターンのストーリーが目立つ。このような表現は、子どもの尊厳を軽視する価値観を伝える。見る者の支配欲を満たし、性犯罪への抵抗感を失わせる可能性があると考えられる。

◆千葉不動産女性強制性交等致傷事件

成人を狙う性犯罪でも、性情報の直接的な影響が疑われるケースは発生した。2021年に千葉県東金市で、マンションの内見中に、案内していた不動産会社社員の女性に性的暴行を加えようとしたとして、30代の男が逮捕された。男は女性を押し倒し、果物ナイフで胸を切るなどしてケガをさせた強制性交等致傷の罪に問われ、懲役8年の判決。「ナイフを見せて脅せば、アダルトビデオのように被害者が性交に応じると考えていた」と裁判長は指摘した。

(2) 性情報の間接的な影響が疑われる事案

◆滋賀医大生3人強制性交等容疑

2022年、滋賀医科大学の20代の男子学生3人が、うち1人の自宅マンションで女子大生に集団で性的暴行を加え、その様子をスマホで撮影したとして起訴された。主犯格とされた1人は1審から罪を認め、懲役5年6か月の実刑となった。他の2人は1審で実刑判決を受けたが、2024年12月の2審で逆転無罪となり、同月に大阪高等検察庁が最高裁判所に上告している。2審判決をめぐっては、性犯罪被害者の心理を理解していない等として、抗議を表明するデモや署名活動が行われた。

報道によれば、自宅内での性行為中に撮影された動画では、行為を強いられて「苦しい」と訴える女性に、男子学生の1人が「苦しいのいいんちゃう」と発言。別の男子学生は続けて、「苦しいって言われたほうが、男興奮するからな」と述べた。再度「苦しい」という女性に対し、男子学生が「(苦しいの)が、いいってなるまでしろよ」と口にする場面もあった。「調教されてないな、お前。ちょっとされないとダメやな」との発言もみられた。

女性が性行為を苦しがっていても、いずれ気持ちよ

くなる。女性の苦しみには取り合わなくともいい。言うことを聞かない女性は調教すればいい……。いずれも、AVやアダルト動画が頻繁に発出する、女性の尊厳を著しく侵害するメッセージである。

前述の男子学生らの発言について、2審の男性裁判長による判決は、脅迫には当たらないとした。「性行為の際にみられることもある卑猥な発言という範疇のもの」と評価できるためだという。女性の尊厳を著しく侵害する発言を、「性行為の際にみられる範疇」とみなす判断は、客観的な根拠があるのだろうか。筆者としては、メディアの性情報が判決に影響を与えていないことを願うばかりである。

◆DJ SODA氏の音楽フェス性被害

2023年、韓国の女性DJであるDJ SODA氏が、大阪で開催された音楽フェスティバルにおいて、観客から体を触られるなどの被害を受けた。フェスの運営会社は、観客の男女3人を、不同意わいせつと暴行の疑いで刑事告発（のちに不起訴）した。

一方、SODA氏が被害時を含め、日頃から肌を出す服装をしていたことから、ネット上では「露出度の高い服を着ていたことが悪い」と批判の声が上がった。服装を理由に被害者を責める考え方には、メディアの性情報が関係しているとみられる。男性向けメディアは50年以上前から、「露出度の高い服装の女性」＝「性行為を受け入れやすい」とのメッセージを発信してきた。筆者が2013年に報告したアンケート調査によれば、露出が高い服を「OKサイン」と考える男子は、21%に上る⁽³⁾。

自身への批判に対しSODA氏は、「私は人々に私に触ってほしいから露出した服を着るのではない。私は服を選ぶ時、自己満足で着たい服を着ているし、どの服を着れば自分が綺麗に見えるかをよく知っているし、その服を着る事で自分の自信になる。」とコメント⁽⁴⁾。筆者の同調査でも、自分の露出した服装に性的な意味を込める女子は4%に過ぎない。誤解を招く性情報により、女性が服装の自由を奪われかねない状況は続いている。

◆芸能界で相次ぐ性的トラブル

著名芸人が、飲み会と称してホテルに招いた複数の女性に対し、性行為を強要していたとの疑惑が、2023

年末に週刊誌で報じられた。芸人側は名誉を傷つけられたとして、週刊誌側に訴訟を起こしていたが、2024年に取り下げた。疑惑について芸人側は、「強制的の有無を直接に示す物的証拠はない」等としつつ、当事者とされる女性には「率直にお詫び申し上げます」とコメントした。

直接的な関連は不明だが、この芸人はAV好きを公言していた。お気に入りとして挙げていたのは、「様々な職種の素人女性を口説き落とし、半ば強引に性行為をさせる」という設定である。

また、女性側へのパッシングが本件でもみられた。「ホテルへ行ったのだから、性行為に同意していたはず」という主張だった。密室へ呼んだり、呼ばれたりすることが性行為への同意を意味しているという「教え」は、メディアの恋愛マニュアルの王道である。

筆者の調査でも、家などの密室で2人きりになることをOKサインと捉える男子は33%と、実に3人に1人の割合だった⁽⁵⁾。ある男子は、「何もしないから」と女性をホテルに誘い、入室後に性行為を拒まれた経験について、「その気がないならホテルまで来るなよ、とはめっちゃめっちゃ思います」と振り返る⁽⁶⁾。

このほか芸能界では、旧ジャニーズ事務所の長年にわたる性加害問題を、2023年に海外メディアが告発。国内のメディアはそれまで、バラエティ番組などで同性愛を笑いのネタにしており、結果的に男性の性被害を矮小化してきた。

2024年末には、著名タレントの性的トラブルと、それをめぐるフジテレビの問題が報じられ、同社を第三者委員会が調査する事態になっている。同社をはじめ複数のテレビ局で、女性アナウンサーを得意先に上納する「モノ」のように扱ってきた疑惑も持たれている。女性の「モノ化」は、アダルトメディアが性行為で女性を意志のない人形のように扱い、その様子をコンテンツとして陳列する中で、当たり前のように行われてきた。

◆生成AIポルノの台頭

この10年で、性情報をめぐる最大の変化といえば、新たな技術「生成AI」によるポルノの台頭であろう。生成AIとは、様々なコンテンツ（絵や画像・動画など）を新たに生み出すことができる人工知能を指す。

2023年、イギリスの公共放送BBCは、子どもを性

的に虐待する画像が生成AIで創作され、売買されていると報じた⁽⁷⁾。乳幼児に性的暴行を加える画像などが含まれている。

BBCは、性的虐待の創作画像の投稿先として、日本のソーシャルメディアが選ばれていることを突き止めた。「日本では、性的な漫画や子どもの絵の共有は違法ではない」とBBCは批判する。その後、日本の一部報道も、生成AIで創作されたとみられる子どもの性的画像が、国内サイトに大量に投稿されている実態を明らかにした。

さらに、「ディープフェイクポルノ」の問題も深刻化している。ディープフェイクポルノとは、生成AIを使い、本人に似せて精巧に創作された性的な画像や動画を指す。国内で初の摘発がなされたのは2020年。AV出演者の顔を女性芸能人とすり替えた動画を、ネット上に掲載した等として、名誉起訴等の容疑で男2人が逮捕された。

近年はネット上に、性的な加工を簡単に行えるサイトが多数登場したこともあり、子どもがディープフェイクポルノの加害者・被害者になる事態も広がりつつある。卒業アルバムの写真や教室内での画像が、同級生の手によって性的に加工され、SNSで共有される等の被害が、2024年頃から報じられるようになった。

生成AIで子どもを性的に加工した創作物は、「子どもを性的な対象にしてい」とのメッセージを、よりリアリティを伴って発信する。ディープフェイクポルノの被害者が受ける精神的苦痛も甚大である。だが、子どもを含む加害者たちは、創作行為に気軽に手を染める。他人の体を、あたかも性的に消費していい「モノ」のように扱う。メディアの性情報が発信してきた、前述の「モノ化」という価値観が、浸透した末の加害である可能性が懸念される。

性をめぐる教育・法整備

(1) 教育

性情報との関連が疑われる性犯罪や性的トラブルが多発し、その形態も新たな技術と共に激変してきたこの10年において、我々の社会は有効な対策を打ってこられただろうか。

教育の面では、大きな変革をもたらしたのが、ユネ

スコによる 2018 年の『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』改訂である⁽⁸⁾。同ガイダンスは、科学的な証拠に基づく性教育を 5 歳から行うことにより、包括的でジェンダー平等な社会の実現を目指すもので、性教育の国際的な指針とされる。日本でも、包括的性教育への関心が高まるきっかけとなった。

改訂版は、新たに対応すべき重要課題の 1 つにソーシャルメディア等の「性情報」を挙げ、学習項目に初めて「メディア・リテラシー」を登場させた。まさに、性情報リテラシー[®]を推奨しているのである。

では、日本の学校の性教育は、性情報に対するメディア・リテラシーの導入を進めたか。文部科学省は現在、学習指導要領の解説で、中学校と高校の保健において、「性情報への適切な対処」の指導を求めている。

しかし文部科学省は、性情報が伝達するメッセージや価値観の読み解き方について、具体的な指導法を紹介するわけではない。性情報に関する授業と称した展開例も挙げるが、SNS の安全な利用方法にとどまっている⁽⁹⁾。また、小学生の学習指導要領は、性情報に関する指導の必要性自体に言及していない。2023 年度からは「生命（いのち）の安全教育」を本格開始したが、やはり教材等で性情報の取り扱いがみられない。

こうした状況に対応すべく、筆者は 2020 年に「性情報リテラシー[®]教育協会」を設立した。性教育に関わる全国の有志が、同会で性情報リテラシー[®]を体系的に学び、教材を開発している。

（2）法整備

性犯罪に関する刑法は、この 10 年で 2 度にわたり改正された。なかでも 2023 年の改正では、強制性交等罪が「不同意性交等罪」となり、「同意しない意思を形成したり、表明したり、全うすることが難しい状態」でなされる性的行為が、処罰対象となった。

前述のように、加害者が被害者の発言や服装、行動を理由に「性的同意があった」と思い込む背景には、メディアの性情報の問題がある。受け手のリテラシーが一層問われるだろう。

生成 AI ポルノについても、規制へ向けた動きが出ている。鳥取県は 2025 年 1 月、実在する 18 歳未満の子どもの顔写真などを使い、AI で加工したわいせ

つな画像や動画を、「児童ポルノ」と定義して取り締まり対象とする案を表明した。実現のため、県青少年健全育成条例の改正を目指としている。

これからの性情報リテラシー[®]に必要なこと

本稿で見てきたように、国の性教育政策は、性情報の読み解きに関する指導が、依然として乏しい。性教育へのメディア・リテラシー導入の有効性については、性情報の誤解に気づく等の研究結果が報告されている⁽¹⁰⁾。メディア技術の進展に即した性教育が、早急に必要である。表 2 に、『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』や海外の性教育教科書も参考にした性情報リテラシー[®]教育のテーマ例を示す⁽¹¹⁾。

なお性情報の歪みは、メディアの利用者に長年にわたり刷り込まれていく。裁判官などの司法職をはじめ、性犯罪問題に携わる大人にも、広くりテラシー研修が行き渡ることが望ましい。

また、この 10 年において、性情報の直接的な影響が疑われる事案が相次いだ。だが我が国では、実在しない子どもを性的対象としたり、実在する成人に性的暴行を加えたりするようなメディア描写について、そのような内容であることを理由に取り締まってはいない。尊厳を侵害する価値観を伝える性情報に対

表 2 性情報リテラシー[®] 教育のテーマ例

対象	テーマ
小学生	○ SNS・出会い・ゲーム ○ インターネットの世界 ～画像・動画・メッセージ投稿～ ○ スマホデビューの前に ～思春期の心と体の守り方～
中学生	○ アダルトコンテンツとの付き合い方 ○ 性的広告と盗撮 ○ “ルッキズム”と痩せ願望
高校生	○ 「自分らしさ」とジェンダー ○ デート DV ○ 性的同意
保護者	○ 性情報の読み解き方 ○ スマホを渡す前の SNS リテラシー ～ゲームと性的グルーミング～ ○ 子どもとの関わり方とジェンダー

しては、適切な法整備が求められる。

性情報リテラシー[®]の新たな10年へ向け、メディアの性情報への対策を加速していくことで、誰もの性が尊重される社会の実現を願っている。

【注】

- (1) 渡辺真由子 (2013)「メディアの性情報と性情報リテラシー」『現代性教育研究ジャーナル』No.25、日本性教育協会
- (2) 性情報リテラシー[®]教育協会の登録商標に認定 (2023年)
- (3) 渡辺 (2013) p.4
- (4) DJ SODA 氏のインスタグラム (2023年8月14日)
<https://www.instagram.com/p/Cv6ol5NPwEc>
- (5) 渡辺 (2013) pp.4-5
- (6) 渡辺真由子 (2011)「女性のノーはやっぱりノーか」(『共同通信』連載)
<https://mayumedia.blogspot.com/2012/09/blog-post.html>

- (7) BBC「生成 AI の児童性虐待画像を売買 日本のソーシャルメディアなどで」(2023年6月28日)
<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-66038728>
- (8) UNESCO (2018) International Technical Guidance on Sexuality Education: An evidence-informed approach. Revised edition.
- (9) 文部科学省 (2020)「改訂『生きる力』を育む中学校保健教育の手引」pp.66-71
- (10) Pinkleton B.E, Austin E.W, Cohen M et al. (2008) Effects of a peer-led media literacy curriculum on adolescents' knowledge and attitudes toward sexual behavior and media portrayals of sex. Health Communication 23: pp.462-472
- (11) 性情報リテラシー[®]教育教材は、2025年上半期に発表会を予定。詳しくは性情報リテラシー[®]教育協会の公式ホームページへ：
<https://www.asml.com>



好評発売中！

ピアカウンセリング 実践ガイドブック

日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会／高村壽子 編著

主な内容

◆B5判：160頁 頒価3000円（税込）

第1章 なぜ、ピアカウンセリングなのか——主体的な生き方を支える健康教育の一方

第2章 主体的な生き方を支えるピアカウンセラーの養成

2-1 ピアカウンセラーになるために

2-2 カリキュラム展開の実例 I

2-3 カリキュラム展開の実例 II—セクシュアリティについて

第3章 主体的な生き方を支えるピアカウンセリング活動実践紹介——ピアカウンセリング手法による性＝生の健康教育を中心に
中学校のピアエデュケーション（対面方式）、中学校のピアエデュケーション（遠隔方式）、高校のピアカウンセリング／ピアエデュケーション（ハイブリッド方式）、駅ナカ保健室（ピアカフェ）、教育支援センター（不登校適応指導教室）におけるピア活動、特別支援学校ピアエデュケーション、リフレッシュマクラス[®]、グループピアカウンセリング講座

第4章 コロナ禍におけるピアカウンセリング養成講座の評価

第5章 ピアカウンセリング活動を支えるしくみ／システム

※送料等は、ホームページを参照してください。

◆JASE ホームページ <https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。
または、Email info_jase@faje.or.jp
TEL 03-5801-6788 FAX 03-5801-6677



● JASE e-booklet 発刊記念

【特別寄稿】

『朝山新一の性科学と性教育』を読んで

明治学院大学社会学部教授 加藤 秀一

「日本のキンゼイ」と呼ばれた性科学者・朝山新一（元・大阪市立大学名誉教授、1908～1978年）。日本性教育協会の設立に大きな役割を果たし、また、1974年から始まった「青少年の性行動全国調査」（1972年）の礎を築いた、日本の性教育・性科学の発展を牽引した第一人者である。その朝山博士の功績をまとめた電子ブックレットが、2月末、日本性教育協会のウェブサイト上で公開された。加藤秀一氏によるレビューをお届けする。

はじめに

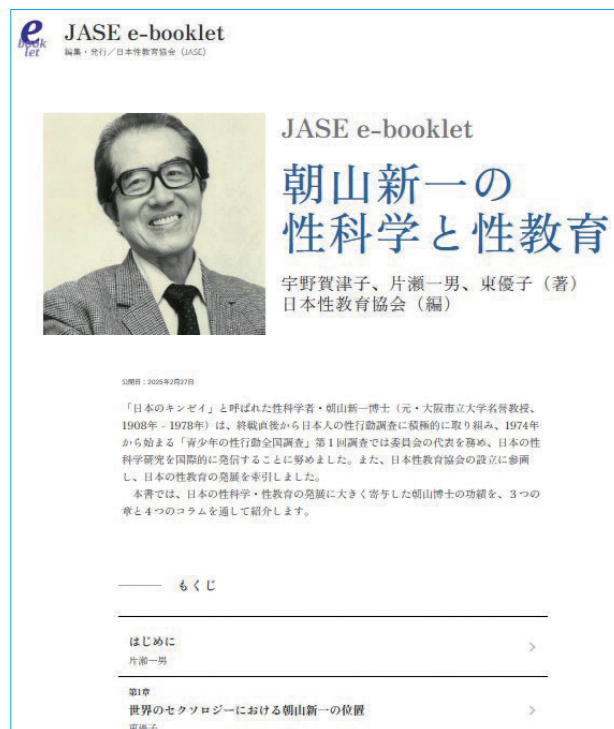
朝山新一は日本における近代的性科学（セクソロジー）およびそれに立脚した性教育の偉大なる先駆者である。その仕事は今日もなお専門家の枠を超えて広く影響を及ぼしているが、その名を記憶している人は少ないのではないかと。たとえば、日本語版ウィキペディアには朝山新一という項目は一応あるものの、その記述はきわめて簡素なものに過ぎない。

今回刊行された『朝山新一の性科学と性教育』がこのような状況を変える第一歩となればよいと思うし、そうなるべきだとも思う。このブックレットの各章が明快に示しているように、朝山の仕事を振り返ることはそのまま私たち自身の性への認識を批判的に再考することであり、したがって人間の性をめぐる今後の思想と実践をより良い方向に推し進めるための糧となる作業だからである。

第1章 世界のセクソロジーにおける朝山新一の位置

ここからは、許された紙幅の範囲で、筆者の眼から見て特に興味深く思われたポイントをピックアップし、若干の私見を述べていきたい。

第1章「世界のセクソロジーにおける朝山新一の位置」（東優子）は、クラフト＝エビングやヒルシュフェルトを源流とするセクソロジーの世界的な潮流を背景としつつ、キンゼイ、マナー、カーケンダールといった同時代のセクソロジストたちとの関わり合いの中に朝山の仕事を位置づけ、再評価する。セクソロジーないし性科学全般に関する重要な情報が手際よく詰め込



JASE e-booklet 『朝山新一の性科学と性教育』
は無料で公開されている
<https://jase.faje.or.jp/book/asayama/>



まれており、初学者には何を措いてもまずこれから読めと言いたいような論考である。

多岐にわたる数多くの論点の中から、「翻訳」の問題を取り上げよう。朝山の最大の業績は、（本書第2章で詳しく解説されるように）日本における性行動・性経験の実態調査というほぼ未踏の領域を開拓したことであるが、他方、欧米のセクソロジーに学び、それを紹介する仕事も怠らなかった。その過程では、当然ながら、それぞれに独自の学問的・文化的背景をもつ外国語の概念をどのような日本語に置き換え

Modern Sex Research (1938-)

1938 Alfred C. Kinsey, a zoologist at Indiana University in Bloomington, IN, USA begins his mostly sociological studies of human sexual behavior.	 Kinsey
1945-1946 After many years of pioneering work for family planning in Scandinavia, the Swedish social and sexual reformer Elise Ottesen-Jensen lays the groundwork for the founding of the International Planned Parenthood Federation (IPPF).	 Ottesen-Jensen
1947 Alfred C. Kinsey founds the "Institute for Sex Research" (today called Kinsey Institute) at Indiana University. The Japanese researcher Shin'ichi Asayama begins his statistical surveys of the sexual behavior of Japanese students. He repeats such surveys every five years for over 30 years, eventually reaching a total of over 20,000 respondents.	 Asayama

オンライン・アーカイブ Archive for Sexology の「性の研究に関する略年表」に紹介されている朝山の功績（第1章より）
 出典：Archive for Sexology (<http://sexarchive.info>)

るかが問題になる。

一つめの事例は、「性科学」か「性学」かという問題である。朝山は、ドイツ由来の「性科学」(Sexualwissenschaft) が「病理的な概念を連想させる」としてこれを嫌い、「人間の性を包括的に把握」する学際的な学としての「セクソロジー」(sexology) を「性学」と訳すことにこだわったという。この訳語は結局定着せず、現在ではほぼ「セクソロジー＝性科学」という認識が共有されているが、これらの語はいかにも専門用語的で素人にとってはとっつきにくく、また自然科学に偏った印象がある。「性学」が定着しなかったことは、セクソロジーおよび性教育の市民的基盤がなお脆弱なものにとどまる現状と無関係とは思われない。

二つ目は、朝山がマナー＆タッカー『性の署名』の邦訳において採用した「性自認」(gender identity) という訳語である。この訳語をめぐる問題状況は東格的に解説しているが、私も若干の考察をつけ加えておきたい。

マナーにおいて、“gender identity”と“gender role”は決して分解できない一つのものの両面であり、それゆえ両者は“gender-identity/role (G-I/R)”と表記される。すなわち、ジェンダーとはつねに自己と他者（社会）との関係の中で成立する現象なのだが、そのどちらか一方の面を主題とするときには“gender identity”または“gender role”をそれぞれ単独で使

うという話なのである。

このように理解するならば、長らくアイデンティティ論のスタンダードとして参照されてきたエリクソンの「自己同一性／自我同一性」(identity) 概念に近いのは、マナーの用語法では“gender-identity/role”という化合物全体であり、そこから抽象的に切り離された“gender identity”ではないという、実にややこしい事情が見えてくる。なぜならエリクソンが青年の発達課題として描いた「自己同一性の確立」とは、自己を社会の中にどう位置づければよいのかという課題を指す概念であり、社会とは別立ての自己認識などではないからである。

そして、以下は推測に過ぎないが、朝山も概ね上記と同様に考えたのではないか。「G-I/R」の全体こそが社会心理学的な「アイデンティティ＝同一性」に対応するなら、その一面に過ぎない“identity”を「同一性」と訳すのは概念上の混乱を招く。そこで、人口に膾炙した「同一性」をあえて用いず、「(性) 自認」という独特な用語を捻りだしたのではないか。「自認」という日本語には、社会とは別立ての自己というニュアンスを読み込みやすいからであろう。だがそれ以降、「性同一性」よりも「性自認」——私としては、どちらもせめて「性別同一性」「性別自認」とすべきだと考えるが——が「ジェンダー・アイデンティティ」の一般的な訳語として広まったことで、アイデンティティという概念が矮小化され、人間における性現象を社会関係の中で把握する契機が見失われがちになってしまったように思われる。この問題について朝山の意見を聞いてみたい気がする。

第2章 朝山新一の性行動調査

第2章「朝山新一の性行動調査」(片瀬一男) には、朝山が戦後初期の「純潔教育」に抗し、科学的知見にもとづく「性教育」を普及・推進するための基盤づくりとして、主に青少年を対象とする性行動の実証的調査に精魂を傾けた軌跡がまとめられている。朝山が用いた調査票の詳細な分析等の内容については筆者が口を挟むべき点はない。ここでは、本章の主な論点ではないかもしれないが、筆者としては特に印象深かった2つの点に触れておこう。

その一つは、朝山が、人間の性行動 (Bh) を生物学的要因 (B) と社会的要因 (S) という二つの変数

をもつ関数として把握していたこと (Bh=f (S,B)) である。賢明なる読者諸氏の中には、そんなのはごく当たり前の見方じゃないかと思われる方もいらっしゃるだろうが、いわゆる「氏か育ちか」(Nature vs. Nurture) 論議、いわゆる生物学的決定論／社会環境決定論の二分法が現在もなお多くの人びとの思考を呪縛していることに比して、朝山の認識はやはり優れていたと言っておきたい（この点に関しては第3章へのコメントの中で改めて触れる）。

ただし片瀬も言うように、発生生物学を自らの知的基盤とする朝山にとって、「性行動研究は一義的には生物学的研究の延長上にあった」ことも確かである。だがそうだとすると、極端に社会的要因に偏り過ぎていのように見えるマナーの理論とは齟齬をきたすのではないかと、という疑問が浮かぶ。この点については、東や宇野も指摘しているように、朝山がマナー説を無条件に受け入れているわけではなく、またマナー自身にしてもその環境決定論者というイメージに反して内分泌学的知見をつねに重視していたことに留意する必要があるだろう。

第二に注目すべきは、これは『性教育』(中公新書、1967年)といった啓蒙的著作を読んでも印象的なことだが、朝山の「性学」が戦後にふさわしい「男女平等」の実現を出発点から決定的な課題として織り込んでいたことである。私としては、朝山の著作が今なお驚くほど新鮮さを失わない最大の理由は、朝山のナチュラルな「男女平等」の感覚にあるように思われる。今日的な性的関係における相互尊重、コミュニケーションとしての性への肯定的感覚が土台を支えているために、たとえ古びた記述が散見されても、全体が過去の遺物であるという印象にはならないのだ。

第3章 朝山新一の性教育スライドに込めたる思い

第3章「朝山新一の性教育スライドに込めたる思い」(宇野賀津子)は、朝山から直接に薫陶を受けた著者が、小中学生のための性教育教材として作成された数多くの、何とも美しく楽しいスライドを紹介しつつ、朝山の性教育実践への熱い思いを解説するエッセイである。

スライドに添えられた朝山による説明文からは、あくまでも科学的な事実認識に立脚しつつ、知識の伝達だけでよしとせず、「理想の人間像」や「社会的人格」

朝山新一の性科学と性教育

第3章 朝山新一の性教育スライドに込めたる思い

宇野 賀津子



はじめに

朝山の性教育に対する考えを紹介する原稿内容を考えていた時、スライドを整理する中で、「前思春期の性教育：小学校高学年から中学生まで『基礎編』」を見つけた。これはスライド・シリーズJASE No.1となっていて、筆者の本棚にも保管されていた。今回朝山のスライドを整理する中で、朝山が言った「図は科学的に正確で、美しい図、わかりやすい図でないといけない」といったこだわりと、1枚1枚のスライドに込めたるこだわりを、改めて確認した。

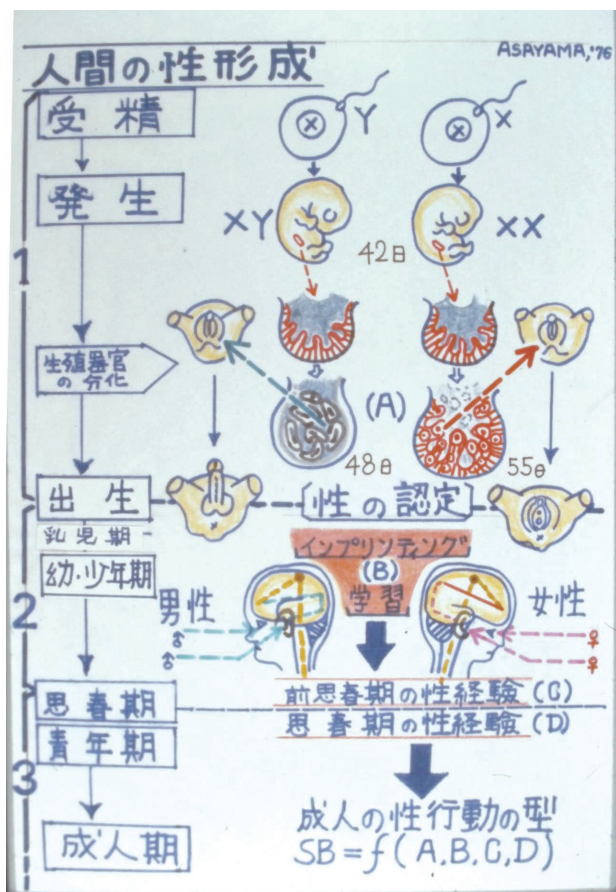
朝山の教え子であり後輩として発生学の分野に進んだ筆者は、何度も朝山の性教育の講義を聞いた。「これはとても大事な事だから」と、大阪市立大学の生物学科で休講になったときなど、スライド一式を持ってきて、生物学科の学生に話をしてくれた。また、筆者が京都大学の大学院に進んでからは、朝山の講演会が、京都・大阪であるときには案内が届いた。学生だということで、参加費を払った覚えがない。それにもかかわらず、その場には講演者や大師所の先生方は朝山は紹介してくれた。



スライドシリーズ『前思春期の性教育：小学校高学年から中学生まで『基礎編』』を紹介する第2章(上)と『現代性教育研究』1974年季刊10号の巻頭折り込み(下)

についての考察や議論を子どもたちに促そうとする朝山の姿勢が鮮明に浮かび上がる。

宇野が「コラム3」で触れている、ヒトの性に関する生物学とフェミニズム運動とのコンフリクトもまたきわめて重要な論点である。1976年にフランスで開催された「性」に関する学際的な一大シンポジウムを主催した社会学者シュルロは、その経験を通じて、生物学的性差を否認していた当初の認識が変化し、「生物学的な性差の事実の考慮を拒否し、婦人問題を論ずるという非科学的な態度は危険」だと思うようになった(E・シュルロ&O・チボー編、西川祐子・天羽す



朝山新一が作図した資料「人間の性形成」(第3章より)

金子・宇野賀津子訳『女性とは何か(上・下)』人文書院、1983年)。この記録の邦訳刊行にも尽力した宇野はその意見に賛同し、後のバックラッシュに対して日本の性教育が抗えなかった理由を、それまでのジェンダー論が「科学に基づいていないところに弱みがあった」ことに見出している。

この指摘は重い。むろんジェンダー論者がこの問題をまったく認識していなかったわけではなく、たとえば江原由美子は、1980年代から「性差別を解消するには生物学的性差を否定しなければならない」という考えの誤りを的確に論じていた。だが他方、日本に限らず、生物学の成果を(謙虚に、かつ批判的に吟味し

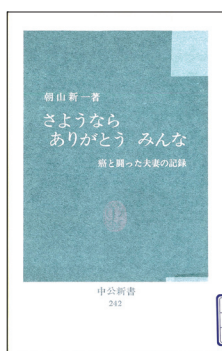
つつ) 学ぼうとせず、江原が批判したような「思考の習慣」に囚われたままの人は少なくない(拙稿「ジェンダー論と生物学：永続する闘争か?」、江原由美子・加藤秀一ほか『争点としてのジェンダー：交錯する科学・社会・政治』ハーベスト社、2019年を参照のこと)。私もまた、ヒトの性に関する正確な科学的認識の必要性和、そのことが性差別の解消と何ら矛盾しないという論理を理解することの重要性を、著者とともに述べておきたいと思う。

おわりに

最後に、朝山新一の仕事について一つ書き添えておきたい。実は本書が企画された当初、筆者は「朝山新一と優生学」をテーマとしてその企画に関わる予定であった。朝山の師にあたる山本宣治が優生学に反対していたこと、逆に朝山が戦後に関わった永井潜が優生学の強力な推進者であったことから、朝山自身の優生学に対する態度を調べようと考えていたのである。ところが、賛成であれ反対であれ、朝山が優生学についてまとめた意見を表明している文書を見つけることができなかったために、寄稿することはかなわなかった。これは少々意外なことだった。むろん今後資料が見つかる可能性はあるが、仮に朝山が優生学から意識的に距離をとっていたのだとすれば、その理由を知りたいと思う。

今回、朝山が癌で逝った妻との最後の日々を記した『さようなら ありがとう みんな：癌と闘った夫妻の記録』(中公新書、1971年)をはじめて読んだ。胸に迫る手記であるが、その冒頭には癌という病気に関する医学的な解説が数ページを割いて書かれている。人間的幸福の向上を訴えつつ、あくまで科学にもとづく「性学」を掲げた朝山新一の面目躍如という気がした。

JASE e-booklet『朝山新一の性科学と性教育』
は無料で公開されている
<https://jase.faje.or.jp/book/asayama/>



朝山新一『さようなら ありがとう みんな』(中公新書)は、JASE 資料室で閲覧することができる

「朝山新一の性科学と性教育」
JASE e-booklet 無料公開中
"日本のキンゼイ"の功績をひも解く!



めぐみ を 生きる

負けない、めげない、あきらめない

【第12回】不安を受けとめ、ともに学ぶ

ここまで1年間、私の幼い頃からのライフヒストリーから書き始めて、生徒や職場の同僚、両親へのカミングアウトにどう向き合い、どう乗り越えてきたか、そして私自身に関することや、学校現場でどのようなことに取り組んできたかを書いてきました。

時折、なぜ永井さんや、その職場では生徒への対応や学校としての取組が上手くいくのか、といった質問を受けることがあります。当初からすべてが順調ではありませんでしたし、時間を要した部分があることは、これまでに書いてきたとおりです。

それでも私個人として心がけてきたことは、この連載のサブタイトルになっていることです。まず「あきらめない」こと。そして一度や二度、上手くいかなくても「めげない」こと。そして状況を大局的に見て、いわゆる試合に負けても、勝負として「負けない」展開に持っていくことを大切にしてきました。戦術や作戦が必要な場面もありますが、日頃から戦略を持って臨むことを大切にしてきたということです。

職場で何かを変えようとしたり、経験がなかったりするような取り組みをするとき、多くの人が感じる「不安」に対して戦うのではなく、きちんと受け止めて、応じて、支えることを心がけてきました。例えば、性的マイノリティに関する相談を受けたり、性の多様なあり方に関する授業をしようとしたとき、「知らないことを聞かれたら、どうしよう」といった不安を感じている場合があります。

そもそも、多くの人は自分が知らない、分からない、答えられないことから距離を置く傾向を感じます。しかし、性の多様なあり方について、きちんと学ぶ機会に恵まれている教員は、現状でも多くありません。「分からないから、できない・やらない」のではなく、「分からないから、子どもとともに学ぶ」スタンスで授業に臨んでいてもらいました。そして

Profile 永井 恵 (NAGAI Megumi)

トランスジェンダーとしての生き方をオープンにし、公立中学校の教員として生きる。多様な性のあり方やジェンダー平等の取組を、人権教育の視点から続けている。



し、授業中に答えられない質問や判断に迷う発言が出たときには、「あとで永井先生に聞いてみようね」をマジックワードとして決めておいたことも、教員の安心感につながっていたのだと思います。もちろん、そう答えた内容については一緒に考え、後ほどきちんと回答してもらっていたことは言うまでもありません。

このようにして、多様な性のあり方やカミングアウトを受け止めるための、正しい知識や理解を広げていったことが、私自身のカミングアウトやあり方を受け止めてもらえる下地づくりにもなっていたのだと思います。

多くの問題や課題が山積みの学校現場で、教職員全員が性的マイノリティに関する専門家になることは難しいし、そうなる必要性もないと思います。しかし、「このことなら、この人に聞けば大丈夫」という人が一人でも、それぞれの職場にいることは必要だと思います。

学校現場には、子どもの貧困や虐待、薬物乱用や自傷行為、障害や発達程度の違い、外国ルーツであること等による様々な課題があります。私は、性的マイノリティのあり方を理解し、その人権課題に向き合うことを入り口として、他のマイノリティ理解や人権課題を考えるヒントを伝えられていると感じています。他人事ではなく自分事として考え、正しく知って支える気持ちを示すことができる「アライ」を増やそうとする考え方は、他の課題にもプラスに働くはずです。他の先生方には、他の課題を学び、それぞれアプローチをしてもらうことで、それぞれの課題について「あとで〇〇先生に聞いてみようね」と言える人が増えていくことを願っています。

ここで述べていることは学校現場のみならず、様々な医療、福祉、行政、そして企業等での取組や対応にも適用できる話だと考えています。

この連載も1年で一区切りとして書いてきました。ここまで拙い文章を読んでくださった方に、心から感謝を申し上げます。そして、ありがたいことにもう1年、連載を続けられることになりました。4月からは、その時々を考えていることや、今回の1年間の流れの中では取り上げられなかった物事について書いていきたいと思います。引き続き、どうぞよろしく願います。

わたしたちの 性教育 アクション

ピアサポートによるエンパワメント向上に関する事業

人生の夢を実現しながら生き生きと健やかに暮らせる未来、社会を目指す地域づくりに寄与することを目的に、平成31年（2018年）に特定非営利活動法人「とちぎみらい with ピア」を設立しました。

この世に生まれた一人一人が生まれ持った性を大切にしながら、仲間とともに輝く未来を切り開いていけるよう、誰一人取り残されない社会を目指しています。思春期の若者および妊娠期からの切れ目のない子育て世代と、彼らを支えるすべての人々に対して、ピア（仲間）同志の支えあい「ピアサポートによるエンパワメント向上に関する事業」を行っています。事業は2本柱で若者とその支援者を対象とした「思春期ピア支援事業」と子育て世代とその支援者を対象とした「子育てピア支援事業」です。

思春期ピア支援事業

思春期の仲間と心を開いて不安や悩みを分かち合い、どうしたらいいか一緒に考えていく活動が「ピアカウンセリング（仲間相談活動）」です。寄り添ってくれる仲間のことを「思春期ピアカウンセラー®（愛称は「ピアっ子）」といいます。

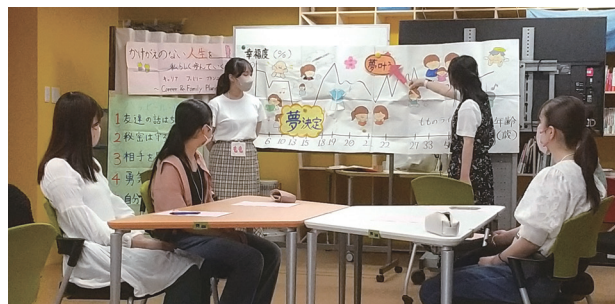
その活動のために日本ピアカウンセリング・ピアエデケーション研究会が、高校生・大学生を対象に思春期ピアカウンセラー養成講座を開催しています。そこで学んだことを生かし、ピアっ子たちは地域でボランティア活動を幅広く行います。

若者とその支援者を対象とした「思春期ピア支援事業」には、①思春期ピアカウンセラー® 養成講座、②思春期ピア実践活動、③思春期の若者および思春期ピアカウンセラー® 支援者公開研修会、④思春期相談センター（ピアルーム）、⑤ピアっ子通信および思春期教材作成」があります。

#24

夢を実現しながら生き生きと 健やかに暮らせる未来社会を

特定非営利活動法人 とちぎみらい with ピア



「キャリア・ファミリープランニング」活動の様子

キャリア・ファミリープランニング

これからのキャリアや未来のファミリーについて考え始めている若者、主に高校生や大学生を対象にした、キャリアを積むことと妊娠・出産に焦点を当てた未来プランを考える思春期ピア実践活動が「キャリア・ファミリープランニング」です。2024年8月25日（日）宇都宮市の繁華街の一角のまちづくりセンター「イエローフィッシュ」で13時から15時まで大学生15名に向けて実施しました。テーマは人生の夢：人生設計と妊孕力・高齢出産・避妊法等々についてです。ピアっ子が一人ひとりの受講生に寄り添い、その夢を実現するために今からできることを共に考えていくピアカウンセリング講座方式で実施しました。

受講者からは「妊娠・出産がライフラインに大きく関わることが認識でき、家族計画・避妊の大切さもわかった」、「キャリアも大切にしつつ、35歳までに出産したいことを考えると、結婚・出産の時期、子供の人数等が具体的になった」などの感想が出ました。このイベントは若者同士が自由な雰囲気の中で自分の未来について語り、キャリア、結婚、出産等について真剣に考え、少子化を防ぐ対策にも繋がる活動になっていると考えています。（次号につづく）

（文責・葭葉敬江 福田 環）

特定非営利活動法人 とちぎみらい with ピア
理事長 高村壽子

ピアサポートによるエンパワメント向上に関する事業を行い、人生の夢を実現しながら生き生きと健やかに暮らせる未来、社会づくりに寄与することを目的に支援活動を行っている。

<https://www.tochigimiraiwithpeer.jp/>

メール：mirai.withpeer@gmail.com

観客のいないオールスター

記者会見で HIV 感染を明らかにし、現役引退を発表した NBA（全米プロバスケットボール協会）のアービン・マジック・ジョンソン氏が古巣のロサンゼルス・レイカーズで現役に復帰したのは、引退発表の会見から 4 年余りを経た 1995～96 年シーズン半ばだった。

復帰第 1 戦は 1996 年 1 月 30 日のゴールデンステート・ウォリアーズ戦で、マジックは途中出場し、27 分間で 19 得点、10 アシスト、8 リバウンドを記録している。往年の切れ味こそなかったものの、ファンの期待には十分、応えられる内容だった。

レイカーズは 1995～96 年のレギュラーシーズンで 53 勝 29 敗。西地区 4 位でプレーオフに進出したものの、ポストシーズンは第 1 ラウンドで敗退した。マジック自身は敗退が決定した後、代理人を通じ二度目の現役引退を発表している。

最初の引退発表に戻ろう。NBA のオールスター戦出場からバルセロナ五輪の金メダル獲得までは引退から半年余りだった。だが、NBA の現役復帰まではその後 4 年近くかかっている。どうしてだったのか。

NBA の公式戦は長いシーズンの間、平均すると 2 日に 1 回は試合がある。プレー中に負傷して出血を伴うことも少なくない。選手たちの間では当初、血液からの感染を恐れてマジックの復帰を歓迎しない空気が強かったようだ。オールスター戦やオリンピック出場は、いわばご祝儀戦だったが、シーズンを通して闘うとなると話は違ってくる。

マジックは 1992 年秋に現役復帰を希望したが、選手の間で HIV 感染に対する不安が強かったことから、いったん復帰を断念している。誤解を恐れずに言えば、スポーツに出血はつきものだ。ただし、止血管理などで感染を防ぐことはできる。NBA は当時、HIV とエイズに関する社会の理解を広げる教育に力を入れ、選手やスタッフに向けた講習会も積極的に開いた。

どんな行為が HIV 感染の原因になり、どんな行為では感染しないのか。そして、どうすれば感染は防げ

るのか。こうした知識の提供と対話を丹念に続け、スポーツによる感染のリスクは限りなく小さくできることを説明していった。

もともとマジック・ジョンソンという伝説のプレイヤーは NBA の選手にとって、そして全米の青少年たちにとっても、あこがれの存在ただけに、こうしたメッセージは広く受け入れられていったという。マジックにとっての 4 年間のブランクは、単なる空白ではなく、社会が HIV 陽性の人たちを受け入れていくために必要な期間でもあった。

1995 年の夏には NBA 最高の選手とされるシカゴ・ブルズのマイケル・ジョーダン氏が、自らの主演映画の撮影現場に NBA のトップ選手を集めて新シーズンに向けたトレーニングキャンプを主宰した。このキャンプには現役復帰前のマジックも参加している。

マイケル・ジョーダン氏はブルズを 1991～93 年に 3 年連続で NBA 優勝に導き、1996～98 年にも 3 年連続で NBA チャンピオンになっている。その間の 3 年間は、NBA から離れ野球選手に挑戦したが、マイナーリーグ生活で終わった。

1995 年 3 月に NBA に復帰した時にはシーズン終了間際だったことから、1 試合を戦い抜く体力はなく、終盤にはへとへとになっていた。観客のいないオールスター戦と言われるトレーニングキャンプは翌シーズンに備えるためだったが、HIV 感染に関する他の選手たちの不安を払拭する機会にもなった。

マジック・ジョンソン、マイケル・ジョーダンという 2 人のスーパースターの不在が続いたことも復帰待望論が高まった背景にはあったようだが、マジックは 1 シーズン限りで再び引退し、実業家への道を選んだ。

大リーグでは今季、大谷翔平、山本由伸両選手に加えて佐々木朗希選手もロサンゼルス・ドジャースに加わり、もうすぐシーズン開幕戦が日本で開かれる。日本人選手の活躍とともに、ドジャースの共同経営者としてのマジック・ジョンソン氏への注目が高まることも、できれば期待したい。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド



トランスジェンダー生徒と学校 「抱えさせられる」困難と性別移行を めぐる実践

土肥いつき 著
発行 生活書院
定価 2,970 円（税込）

10 人のジェンダーヒストリー

本書の登場人物は 10 人、いずれのメンバーも高校卒業以前は X ジェンダーやノンバイナリーなどのアイデンティティはもっていなかった。つまり、トランスジェンダーの生徒であった。

この 10 人は、著者である土肥いつき氏が主催しているトランスジェンダー生徒の自助グループにサポーターとして参加している成人である。

ユイコさん（第 4、5 章に登場）、マコトさん（第 4、6 章）、ツバサさん（第 3、4 章）、キョウコさん（第 3、4 章）の 4 人はトランス女性である。ユウキさん（第 3、4 章）、ユウヤさん（第 3、4 章）、アキさん（第 3、4 章）、シュウトさん（第 3、4 章）、ススムさん（第 3、4 章）、ハルトさん（第 3、4 章）の 6 人はトランス男性である。ただし、アキさんは高校時代はトランス男性という自認をもっていたが、大学卒業後トランス男性という自認がなくなっている。

著者である土肥いつき氏は、京都府立高校の教員で、関西大学非常勤講師のトランス女性である。土肥氏は本誌『現代性教育研究ジャーナル』に長らく連載執筆してきた。トランスの経緯は連載記事の一部が『「ありのままのわたしを生きる」ために』（日本性教育協会）*と題した書籍にまとめられている。

前置きが長くなったが、本書の構成を紹介する。

序 章 研究の背景と本書の目的

第 1 章 先行研究の検討と本書の分析視角

第 2 章 調査の概要

第 3 章 トランスジェンダー生徒に対する学校の対応
と当事者からの評価

この章では、8 人の登場人物から詳細なインタビューを行いその内容が生声で記述されている。

第 4 章 学校の性別分化とトランスジェンダー生徒の

ジェンダー葛藤

この章では、全ての登場人物が学校での AGBA（出生時に割り当てられた性別）との葛藤が語られている。

第 5 章 トランスジェンダー生徒による性別移行をめぐる日常的実践

この章では、トランス女性であるユイコさんの保育所時代から高校時代までのジェンダーヒストリーが綴られている。

第 6 章 トランスジェンダー生徒による実践しない
「実践」

この章は、トランス女性であるマコトさんの女子グループへの参入過程のジェンダーヒストリーである。ある意味で、ユイコさんとは真逆とも言える過程を経ている。

終章 トランスジェンダー生徒の学校経験から見えてきたこと

ここで、著者である土肥氏は、本研究調査について〈そもそも本書は「トランスジェンダー生徒が直面する困難は学校が作りだしている」という問題意識からスタートした〉と記している。そして〈調査協力者のみなさんのジェンダー葛藤軽減への実践は「個人の内面の問題」の解決によってではなく、他者との相互行為の中でおこなわれた性別カテゴリーの「再割り当て」という社会的行為によって達成されたものだった〉と語り、〈トランスジェンダー生徒の学校経験は実に多様である〉と述べている。

そして〈こうした個々の事例の違いが示唆していることは、トランスジェンダーをひとくくりにして、支援のあり方をマニュアル化することの危険性である〉と一つの結論を導き出している。ただし、結論はこれだけではない、この特異な調査研究は、多くの示唆を私たちに与えてくれる。

（教育ジャーナリスト 日向野一生）

北東北性教育研修セミナー 2024

主催：北東北性教育研修セミナー実行委員会 協賛：日本性教育協会
協力：一般社団法人 Broken Rainbow-japan 青森レインボーパレード実行委員会

アクティビズム
アカデミズム & へ、ようこそ

性の権利を尊重する社会をつくる 活動と研究

～青森での10年を振り返り、未来へつなぐ～

2025年3月22日（土） 14:00 - 16:30

場所：青森県男女共同参画センター アピオあおもり 大研修室

参加費：対面現地／無料 オンライン／1,000円

<https://activism-academism.peatix.com>

⇒ 申込みフォーム ⇒



<セミナー趣旨>

2014年から2024年までに青森を拠点に行われてきたLGBTQ+に関する性の権利に関する活動を振り返る。

青森を拠点に行われた、当事者たちの居場所づくり、地方におけるプライドパレードのはじまり、相談支援、同性婚を可能にするための働きかけ。そして青森を拠点とした全国各地での活動としての性暴力に関する政策提言や人材育成。こうした活動がどのような思いと共に青森で生まれ青森や他の地域の人々、特に当事者たちにどのような影響を与えているのだろうか。

これらを実施してきた一人である岡田実穂（活動家）と、これらの活動を見守り続けてきた東優子（大学教員）がそれぞれの立場・視点で対談する。当事者たちを中心においた権利擁護がどのような思い、歴史の中で培われていくのか、未来に向け、アクティビズム&アカデミズムの「楽しさ」も伝えたい。



岡田実穂

一般社団法人 Broken Rainbow-japan 代表理事

東優子

大阪公立大学教授

第14回日本「性ところ」関連問題学会学術研究大会

生物学とジェンダー学の対話

生物学 vs ジェンダー学 から 生物学 and ジェンダー学へ

大会長 麻生 一枝(成蹊大学)

会場 ホテルメトロポリタン(東京・池袋)

開催日 2025年6月7日(土)



大会長講演 9:00~9:55 座長:東邦大学 伊藤 桂子

「いち生物学者からジェンダー学への素朴な疑問 一外にいるからこそ見えてくるもの」
成蹊大学 麻生 一枝

現代のトピックス 10:00~10:55 座長:当学会理事 刀根 洋子

「生殖技術とジェンダー」
金沢大学 日比野 由利

教育講演 11:00~12:00 座長:横浜市立大学 松下 年子

「フーコー『性の歴史』を読む」
金沢大学 仲正 昌樹

メインシンポジウム 13:30~15:40 座長:西川口榎本クリニック 齊藤 章佳 東邦大学 齋藤 益子

「科学的データとジェンダー」
明治大学 高峰 修 埼玉大学 田代 美江子 群馬大学 高井 ゆと里 横浜国立大学 佐々木 成江

基調講演 15:50~16:50 座長:当学会理事 安田 美彌子

「ジェンダー学の今」
明治学院大学 加藤 秀一

公開講座(参加費無料) 17:00~18:00 座長:成蹊大学 麻生 一枝

「生命誌から見たジェンダー」
JT生命誌研究館 中村 桂子

一般演題

一般演題発表者募集中

発表要旨を2025年4月30日(水)までに下記大会事務局までお送りください。

懇親会 18:10~ プログラム終了後、懇親会(情報交換会)を行います。

- 大会に参加の事前申込みはホームページからお申込ください。〈事前参加登録締切:2025年5月10日(土)〉
- 参加費:会員 事前 2,000円 一般 事前 3,000円 学生 事前 1,000円 懇親会費 2,000円
当日 3,000円 当日 4,000円 当日 2,000円 学会入会 入会金:1,000円 年会費:5,000円

学会ホームページ <http://www.jasm.or.jp>

大会ホームページ | 事前申込/一般演題登録はこちら▶

日本「性ところ」関連問題学会 [理事長] 榎本 稔(榎本クリニック) [実行委員長] 齊藤 章佳(西川口榎本クリニック)

お問い合わせ 学会事務局 TEL.03-3982-5345

T:03-3982-6089 FAX:03-3982-6089 E-mail:sei-kokoro1@enmoto-clinic.jp



◆ JASE 主催セミナーのお知らせ ◆

詳細は次号および JASE ウェブサイトにて近日公開します

「性行動調査データ分析」講座《入門編》

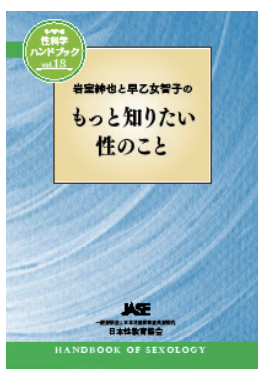
「第8回青少年の性行動全国調査」のデータを使って、テーマにそったデータ分析の方法を解説し、統計分析ソフト（SPSS）を使って実際にデータ解析をワークショップ形式で学ぶ講座です（PC 持参不要）。「青少年の性行動全国調査」データをご自身で分析してみたいという研究者や教育関係者向け。

講師：林 雄亮
（青少年の性行動全国調査委員・
武蔵大学社会学部教授）

日時：5月31日(土)13～17時 会場：東京・武蔵大学江古田キャンパス

受講料：6000 円 定員：20 名 対象者：性行動・性教育の研究者（大学院生含む）・「青少年の性行動全国調査」に関心をお持ちの方（なお、基礎的な PC スキルが必要です）

詳細は変更になる場合があります。お問い合わせ：info_jase@faje.or.jp（JASE セミナー係まで）



性科学ハンドブック Vol.13

好評発売中！

岩室紳也と早乙女智子の もっと知りたい性のこと

岩室紳也・早乙女智子著

◆ A 5 判：138 頁 頒価 700 円

『現代性教育研究ジャーナル』2014 年 4 月号～2017 年 3 月号に連載した「もっと知りたい女子の性／もっと知りたい男子の性」に、加筆・訂正して再構成したものです。

主な内容

part 1 多様な性／「性」を科学する難しさ／女は女として生まれない／性別違和／ジェンダーバイアス・ジェンダーギャップ ほか
part 2 女性の性／膣 VAGINA はくほみである／女子もします！ マスターベーション／人工妊娠中絶と女性の身体権 ほか
part 3 男性の性／「包茎」を科学する／男子はおちんちんで育つ／「男」は環境で育つ性／男性の性機能って何？ ほか

著者プロフィール

岩室 紳也／泌尿器科医。ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）代表。

早乙女智子／産婦人科医。日本性科学会副理事長。セックスセラピスト。

※送料等は、ホームページを参照してください。

◆ JASE ホームページ <https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp

TEL 03-5801-6788 FAX 03-5801-6677



JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室 について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧予約】事前に電話で予約が必要 [tel 03-5801-6788]。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】月曜日～金曜日 11:00～17:00

【休室日】土曜日、日曜日、祝日、年末年始 ※この他、臨時に休室することがあります。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法



収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、セクソロジー、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、絵本・写真集、ダイヤモンド文庫、団体資料・手引き・白書（都道府県資料、大学関連資料、官公庁資料など）ほか。 https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy_N7GNQ_WQaeg